

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720161

研究課題名(和文) 福永武彦を通した1930～40年代の東大の若者の知的ネットワークの構築

研究課題名(英文) An Analysis on the relationship of young literary men in Tokyo University of the 1930s-1940s, taking the work and life of Takehiko Fukunaga

研究代表者

中島 亜紀(西岡亜紀)(NAKAJIMA(NISHIOKA), Aki)

お茶の水女子大学・比較日本学教育研究センター・研究員

研究者番号：70456276

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、福永武彦を軸として1930～40年代の東大の若者を中心とする西洋文化受容の知的ネットワークの見取り図を構築するものである。当時の文芸空間における若者の知的つながりを、具体的な人の動きとともに明らかにし、戦後に本格的に出発した世代の文学者や芸術家が持っていた人脈や思想的背景を、実証的に考察した。長崎、広島、フランスにおける調査、内外の学会や図書・雑誌での成果公表を行った。2009～2011年度に若手研究Bで行った調査研究に接続しつつ、日本近代のフランス文学教育における宣教師の動向、福永の卒業論文(仏語)の全訳、友人や関係者との面談など縦横のつながりを補完、知的地図の拡充を目指した。

研究成果の概要(英文)：This research project considered the intellectual relation of young literary men in Tokyo University of the 1930s-1940s, taking the work and life of Takehiko Fukunaga(1918-1979) and his literary fellowship as a youth. Several field works in which many research materials were collected, were conducted in Nagasaki, Paris, and Hiroshima, whose results were made public on journals and presentations in the several academic meetings.

While continuing to 2009-2011 year research study that was conducted in young researchers B, elucidation of the role played by missionaries in France literary education of Japan's modernization, to translate the graduation thesis by the French Fukunaga Takehiko has been submitted to the University of Tokyo, such as through to meet with officials and friends of Takehiko Fukunaga, to complement the vertical and horizontal of the network, and efforts to expand the intellectual map.

研究分野：比較文学

キーワード：福永武彦 1930～40年度 加藤周一 フランス 宣教師 長崎 ロートレアモン

### 1. 研究開始当初の背景

福永武彦(1918-79)は、小説家であると同時にフランス文学の研究者として西洋の文学や文化を自らの創作に意欲的に取り入れた人物である。2009年に没後30年を迎え、遺族の池澤夏樹氏や若手の研究者を中心に、活発な研究・出版活動が展開されている(近年の具体的な研究動向は、例えば拙稿「福永武彦 研究動向」〔『昭和文学研究』第52集、2006年〕に詳述)。応募者自身も、福永における19~20世紀のフランス文学の受容を軸に、さまざまなアプローチでの研究活動を展開してきた。2006年度に、詩人ボードレール Charles Baudelaire (1821-67)の「万物照応」Correspondancesの文学理論が「純粹記憶」という福永独自のモチーフのなかに発展・定着していく様相をまとめた博士論文「福永武彦におけるボードレール 「純粹記憶」の生成をめぐって」をお茶の水女子大学に提出、2008年10月に『福永武彦論 「純粹記憶」の生成とボードレール』として東信堂より刊行、「福永武彦『幼年』におけるボードレール」〔『比較文学』第50巻、2008〕、「福永武彦『死の島』の視点とアンドレ・ジイド」〔『比較文学』第51巻、2009〕などの論文を執筆するなど、中・後期の福永作品の西洋文学受容について考察してきた。

こうした活動を経て応募者は、福永の中・後期のテキストに現れる西洋文化の摂取は、1930~40年代の萌芽期における西洋文化との出会いにその方向性を規程されたものではないか、との問題意識を持ち、科学研究費補助金・若手研究B「福永武彦を通した1930~40年代東大の若者の知的ネットワークの調査」に応募、採択された(平成21~23年度)。都内の学術機関、長野・長崎・広島などの現地調査を経て、ネットワークの概要が明らかになりつつある。

上記の若手研究Bにおける調査から、福永の知的ネットワークは東京大学内にとどまらず、明治以降の近代学問の系譜という縦のつながり(キリスト教の移入や日本における近代学問の編成など)や1930~40年代の国内外の他の文芸ネットワークという横の広がり(モダニズム、原爆文学、宗教文学など)を含んだ、広範な時空間を取り込むものであるという考察が導かれた。つまり、知的ネットワークを完成させるには、そうした広範な時空間を補完する裏づけ調査も必要である。逆に、その広範な知的ネットワークを土台として作品の解釈を行えば、ダイナミックな作品解釈が可能なのではという仮説も立てられる。例えば、晩年の大作でありながらその難解さからまだ単独での作品論がない『死の島』(1971)について、知的地図を応用した作品論の刊行も可能と考え、本研究の着想に至った。

なお、上記の観点からの『死の島』読解を助ける先行研究として、大江健三郎、加藤周一、渡辺一夫らの著作、近年翻訳が出たロバ

ート・J・リフトン『ヒロシマを生き抜く(上)(下)』(岩波現代文庫、2009年)やジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く 日本文学と原爆』(法政大学出版局、2010年)、有末賢「生と死のライフヒストリー 相互・循環・一回性」(『法学研究』、2011年6月、著者は本研究の研究協力者)などがある。

### 2. 研究の目的

(1) これまでの調査を継続しつつ知的地図の完成を補うような総括的な調査を行い、資料収集に努める。

1930~40年代の東京大学における図書原簿の閲覧と複写の継続。

福永が在籍した教育環境(蔵書・教育者・カリキュラムなど)や友人関係資料の収集。

長崎におけるフランス学の起源と編成の調査。

同時代の原爆文学資料(例えば、栗原貞子、原民喜、佐々木基一関係書類など)の調査。

遺族や関係者への聞き取り

(2) 収集資料の解読と理論構築と、それを踏まえた知的ネットワークの構築を行う。

東京大学において複写した図書原簿の解読(検閲や国家統制で移入されなかった時期の考査も含む)、仏文科の購入図書リスト・年譜の作成と分析。

福永武彦の卒業論文(仏語)の全訳の刊行。

所蔵図書への書き込み、カリキュラムや学科編成の分析による知的交流の裏づけ。

1930~40年代の福永たち若手文学者たちに連なる人的系譜や他文化との接点の分析。

(3) (1)(2)を土台にした、国内外における成果の発信を行う。

### 3. 研究の方法

2012~2014(平成24~26)年度の3ヶ年計画で行った。既に2009~2011(平成21~23)年度にわたって行った若手研究Bの課題に接続する趣旨のものであり、1930~40年代の東大の若者の知的ネットワークの調査をさらに進めながら、それを踏まえた知的地図の完成を目指した。

おもな方法は以下。

(1) 現地踏査

福永が在籍していた教育機関の教育環境(蔵書・教育者・カリキュラムなど)や交友関係の調査と資料収集から、西洋文化との接点、人脈、文化背景を探る。福永の出身校やそれらに関する記録が残る施設に赴き、記録を閲覧、資料収集を行う。今回の調査では特に下記の事項の充実を図る。

東京大学図書館(本郷・駒場)における

図書原簿の閲覧・複写を継続、データを蓄積、分析し、知的地図の作成や作品分析に反映させる。新たな視点として、検閲や国家統制との関係性にも着目する。福永と同世代の文学者や東京大学の後進など関係者への聞き取り調査。関係者が高齢化しているため、インタビューできる時期に、知識の供給を受ける。

## (2) 資料収集 / 分析

理論構築の基盤となるような資料やこれまでの調査を補う調査による新資料を収集・分析する。若き日の福永の知的人脈が、どのような歴史的系譜に連なるものなのか（例えば東京大学の創成や OB のつながり）、また同時代の他の文芸空間とどのように関わるのか（例えば原爆文学やモダニズムなどの他の文芸思潮との関係）などを考察し、成果発信の基盤データを作る。

福永が在籍した東京大学仏文科の起源と編成について、その起源から今日までの人物や機構に関する資料と収集する。既に着手している長崎における宣教師の調査を継続、併せて各種のデジタル情報も閲覧する。

パリの国際大学都市の日本館で保有するデータの閲覧と打ち込みと解説を行う。

『死の島』生成の背景に関わる同時代の原爆文学や反戦ネットワークなどとの関係を調査・考察する。

収集資料の解説や理論的分析を進め、戦後に文学者として出発した世代が、戦前に築いていた知的つながりとその背景を明らかにする。

## (3) 成果発信

国内外の学会における成果発信を行う。また、これまで執筆途中であったものも含めて図書や論文や翻訳の刊行を実現する。とくに、2013（平成 25）年度以降は、総括としての調査活動と発表活動に力点を置く。とくに、国際学会での報告による日本文学の国際的なアピールに努める。また最終的にはすべてを、単著『「死の島」論』（仮題）に集約する。

## 4. 研究成果

### (1) 2012（平成 24）年度

都内の諸機関や郷里の広島における調査を継続しつつ、先の若手研究の期間から継続していた課題の成果発信を、意欲的に行った。

成果発信は以下。4 月、昭和文学学会研究集会「特集：戦後作家と翻訳」にて研究発表（「福永武彦とボードレール翻訳」）。11 月、国際日本学会（IAJS）にて英語による研究発表。12 月、共編著『福永武彦を語る 2009～2012』を刊行（5～10 月編集）。海老根龍介・福田耕介編『異文化の中の日本文学』（白百合女子大学アウリオン叢書第 11 号）を脱稿（「死者の記憶を紡ぐ文学 - 一九三〇～四〇年代の若

手文学者の知的ネットワーク」2013 年 2 月刊行）。

以上と並行して、次年度に継続する成果発表のための準備も行った。2013 年 7 月にお茶の水女子大学にて開催予定の国際日本学シンポジウム「フランスへの憧れ 生活・芸術・思想の日仏比較」の講演者や招聘研究者との打合せ、同 7 月にパリ・ソルボンヌ大学にて開催予定の国際比較文学会（ICLA）の研究発表のエントリー（仏語）25 年度刊行予定の近代の学問生成に関する論文の原稿執筆などに、かなりの時間を割いた。なお、時間と経費の都合から、国内の地方調査は次年度以降に繰り越した。

### (2) 2013（平成 25）年度

総括としての研究成果の発信と主軸にしつつ、長崎やフランスにおける調査の補完を行った。

成果公表は以下。7 月 6 日、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター主催の第 15 回国際日本学シンポジウム「フランスへの憧れ 生活・芸術・思想の日仏比較」のパネラーとして「宣教師が運んだフランス 長崎・築地・横浜の近代」を発表、共同討議にも参加（上記は後に論文として 2014 年 3 月刊行の『比較日本学教育研究センター研究年報』第 10 号に掲載）。なお、本シンポジウムには、実行委員として企画・運営にも参画した（1～7 月）。7 月 24 日、パリ・ソルボンヌ大学にて開催の国際比較文学会（ICLA）第 20 回国際会議にて研究発表。（“La censure des médias au Japon dans les années 1940 - les problèmes de traduction”）。9 月 27 日、白百合女子大学大学院オムニバス授業「全体と部分 文学・思想・美術」にて「社会のなかの個人の死～福永武彦『独身者』と『死の島』をつなぐもの～」を講演。翌 3 月 27 日、日本・スイス国交樹立 150 年記念国際シンポジウム「シュペーリと「ハイジ」の世界」のパネラーとして「スタジオジブリの出発点としてのアニメ『アルプスの少女ハイジ』」を発表、アルフレッド・メッサーリ氏およびペーター・ビュトナー氏らとの共同討議に臨んだ。

調査は以下。都内の日仏会館等にて、日仏会館とフランス宣教師や大使クロードルとの関係の調査を行った。また、7 月 21 日～8 月 1 日のパリへの学会出張に合わせて日本館に滞在した折に、1929～59 年の滞在者を調査し、リストのデータ入力と分析を行った。10 月 31 日～11 月 2 日には長崎調査と長期の調査も行った。このほかに、福永の友人であった山崎剛太郎氏との面談や長崎の大浦天主堂や歴史文化博物館における関係者との面談を行った。

全体としては、近代の大学教育の基盤の一つとなったフランス語教育の萌芽や 1930～40 年代の広い分野における日仏交流についての基礎調査を行うことができた。

(3) 2014 (平成 26) 年度

最終年度にあたり、引き続き、活動を総括する成果報告を中心に行った。

もっとも重要な成果は 2014 年度以前から執筆していた 2 点の原稿の完成と刊行である。

「近代日本のフランス語教育の起源と編成 宣教師の果たした役割」『近代学問の起源と編成』所収、勉誠出版、2014 年 10 月)

福永武彦著(西岡亜紀・岩津航共訳)『昭和十五年東京帝国大学仏蘭西文学科卒業論文 詩人の世界 ロートレアモンの場合』科学研究費補助金報告書、2015 年 3 月、は 1930~40 年代の若者の学んだ機関の成立背景についての探査と考察、は福永武彦がフランス語で 1941 年に提出した卒業論文の日本語訳と文体模写による資料化である。

上記以外の成果公表には、以下のものがある。西岡亜紀「社会のなかの個人の死 ~ 福永武彦の全体小説と「生きる」こと~」白百合女子大学言語・文学研究センター編、井上隆史責任編集『全体と部分』(アウリオン叢書第 14 号)所収、2015 年 3 月。西岡亜紀「書評: 岩津航『死の島からの旅 福永武彦と神話・芸術・文学(世界思想社、2013 年)』」『比較文学』第 57 巻、2015 年 3 月 シンポジウム「近代日本におけるフランス象徴主義 受容・模倣・創造」にて、「セッション : マチネポエティクの時代表」のパネラー、題目「福永武彦におけるボードレール - 「規範」としてのフランス詩」2015 年 3 月 14 日、於 学習院大学。

(4) 今後の課題

3 年間全体の動向としては、長崎調査や宣教師の来日にかんする成果報告ほか、パリ出張や 1930~40 年代の東大仏蘭西文学科の成立背景の探査に予定よりも時間を割いたこと、また、それに伴って問題関心が、より総合的な学問基盤成立の探査へと移ったことなどから、『死の島』論への集約という当初の計画とは異なる方向性での総括となった。しかし、全体としては、1930~40 年代の若者の知的背景やつながりをかなり具体的に明らかにすることはできた。

今後の課題は、パリ出張で得た戦争前後の日本の学術関係者のパリ滞在リストを出発点として、フランスにおける日仏の学問交流とそれが戦後の日本に果たした役割を探査することである。また、加藤周一や中村真一郎を中心とする福永の最も親しかった友人たちのネットワークにも調査の対象を広げることにより、さらにグローバルな視野の見取り図を描くことである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

西岡亜紀(依頼)「書評: 岩津航『死の島からの旅 福永武彦と神話・芸術・文学(世界思想社、2013 年)』」『比較文学』第 57 巻、

2015、pp.130 - 133

西岡亜紀(査読無し)「宣教師が運んだフランス: 長崎・築地・横浜の「近代」」『比較日本学教育研究センター研究年報』10 号、2014、pp.15 - 25

本間邦雄(司会)・西岡亜紀(パネリスト)・田中琢三(パネリスト)(査読無し)「パネルディスカッション第 15 回国際日本学シンポジウム フランスへの憧れ: 生活・芸術・思想の日仏比較」同上、pp.57 - 61

〔学会発表〕(計 10 件)

西岡亜紀「福永武彦におけるボードレール - 「規範」としてのフランス詩」シンポジウム「近代日本におけるフランス象徴主義 受容・模倣・創造」における「セッション : マチネポエティクの時代表」パネラー、2015 年 3 月 14 日、於 学習院大学

西岡亜紀「スタジオジブリの出発点としてのアニメ『アルプスの少女ハイジ』」日本・スイス国交樹立 150 年記念国際シンポジウム「シュペーリと「ハイジ」の世界」パネラー、2014 年 3 月 27 日、於 東京理科大学

Aki Nishioka, "La censure des médias au Japon dans les années 1940 - les problèmes de traduction" ICLA (国際比較文学学会) 第 20 回国際会議、2013 年 7 月 24 日、於 パリ・ソルボンヌ大学

西岡亜紀「社会のなかの個人の死 ~ 福永武彦『独身者』と『死の島』をつなぐもの~」白百合女子大学大学院オムニバス授業「全体と部分 文学・思想・美術」講演、2013 年 9 月 27 日 於 白百合女子大学

西岡亜紀「宣教師が運んだフランス 長崎・築地・横浜の近代」お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター主催の第 15 回国際日本学シンポジウム「フランスへの憧れ 生活・芸術・思想の日仏比較」、2013 年 7 月 6 日 於 お茶の水女子大学

Aki Nishioka, "The Role of Missionaries in Foreign Language Education in Modern Japan: From Nagasaki to the Imperial University" 国際日本学会第 9 回研究集会、2012 年 11 月 24 日、於 立命館大学

西岡亜紀「福永武彦とボードレール翻訳」昭和文学会第 50 回研究集会、2012 年 5 月 12 日、於 大正大学

西岡亜紀「人生の階段図を解く」仏教文学会平成 24 年度 4 月例会シンポジウム「熊野観心十界図・参詣曼荼羅・老いの坂図を解く」2012 年 4 月 28 日、於 専修大学

西岡亜紀「折口信夫とことわざ研究」日本ことわざ文化学会 4 月例会、2012 年 4 月 27 日、於 明治大学

⑩西岡亜紀「近代文芸のなかの「道成寺」 古典とモダニズムの融合」国際熊野学会平成 23 年度熊野例会、2012 年 3 月 12 日、於 太地町公民館(和歌山県)

〔図書〕(計5件)

福永武彦著(西岡亜紀・岩津航共訳)『昭和十五年東京帝国大学仏蘭西文学科卒業論文 詩人の世界 ロートレアモンの場合』科学研究費補助金報告書、2015、126

西岡亜紀他 井上隆史責任編集『全体と部分』(白百合女子大学言語・文学研究センター編、アウリオン叢書第14号)2015、187 \* 「社会のなかの個人の死 ~福永武彦の全体小説と「生きる」こと~」pp.115 - 131

西岡亜紀他 井田太郎・藤巻和宏編『近代学問の起源と編成』、勉誠出版、2014、444 \* 「近代日本のフランス語教育の起源と編成 宣教師の果たした役割」pp.107 - 132

西岡亜紀他 海老根龍介・福田耕介編『異文化の中の日本文学』(白百合女子大学言語・文学研究センター編、アウリオン叢書第11号)2013、190 \* 「死者の記憶を紡ぐ文学 1930~40年の若手文学者の知的ネットワーク」pp.43-56

西岡亜紀他 近藤圭一・岩津航・西岡亜紀・山田兼士共編『福永武彦を語る 2009 - 2012』濠標、2012、223

〔その他〕

年報・福永武彦の世界  
<http://www.i.zaq.jp/scene/tfukunaga.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中島(西岡)亜紀(NAKAJIMA-NISHIOKA AKI)  
お茶の水女子大学・比較日本学教育研究センター・研究員  
研究者番号:  
70456276

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし